日本文学全集
24

中野重治

むらぎも・梨の花

河出書房

中野重治

カラー版日本文学全集　24

1970©

昭和四十五年三月二十日　初版印刷
昭和四十五年三月三十日　初版発行

定価　七五〇円

著者　中野重治
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装幀者　亀倉雄策

本文印刷　中央精版印刷株式会社
口絵印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロース　日本クロス工業株式会社

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表)　振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331124-0961

目次

中野重治

むらぎも……五

梨の花……一五三

注釈　紅野敏郎　三四七

年譜　三五九

解説　本多秋五　三六七

巻頭写真　榊原和夫

色刷挿画　むらぎも　井上長三郎

梨の花　海老原喜之助

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

中野重治

むらぎも*

一

「家庭教師か。どんな奴が出てくるんだろう……でも、妙なもんだなア。へんだなア、代理の家庭教師なんてもの……」

谷中清水町の合宿から、藍染橋の谷間へ一たん降りて、根津八重垣町から本郷台へとのぼってきながら、これから出かけて行く追分合宿での仕事のことを、何か照れた気持ちで安吉は頭に浮かべた。

ここいらは三年まえの地震火事をまぬかれて、中古のカビの生えた、しかし中等の品といった表情でのこっている。焼けた大学に向きあって、電車道のすぐ反対側に町屋並みが残り、そのうしろに、白山から春日町へ行く電車みちを高みから見おろして、丸山町へん一帯が、大きな樹木の群をいくつもかかえこんで、人が冠りものをしたような姿で残っている。灰色とみどり色とのその下には、旧小名で男爵*だのというもの、その成れのはてのようなもの、役人のようなもの、大学教授のようなもの、ちょっとした勤め人といったものが住んでいて、蔭の多い通りを歩きながら、ひょいと、活字で知った学者の名を表札に見つけた安吉が、「お、こんなとこに、こんなつつましさで住んでるのだなア……」と思ったこともあったが、いま歩いて行くのは、その樹木でこんもりとした区域ではない。その手前の、大学にいっそう近い、電車通りにくっついた町屋の区域で、これという目じるしのない路地を裏へはいった、粗末でぶあいそなシモタヤ*の一軒というところだった。

昼めしを過ぎた時刻で、人通りはどれほどにもない。今あるいて行く当の追分の区域、そのうしろの丸山町の区域、そのもう一つ向うに、指ケ谷町、八千代町、柳町へんの貧しい窪地区域のあるのをこの安吉は知っている。清水町と伝通院との往きかえりに、その窪地の、狭い、うねうねした、ほこりの溜まった通りを幾度か通ってもいた。ただ彼は、そこを、路地をひろって、近道として通りぬけたのに過ぎなかった。足ばやに通りぬけながら、彼には、そこの一帯に楽しさが見られなかった。かえって、その窪地がもう一度高まって、小石川植物園*をのせたあたり、そのへんに一種の楽しさが見だせていた。彼の暮している清水町の合宿、それを入れて上野公園へとつづくそこの高台、それから大学のあるこの第二の高台、それから植物園のある第三の高台、この三つの高台と、それに挟まれた八重垣町の窪地、指ケ谷町、八千代町の窪地の二つの窪地とが、自分の心理に不安定な混雑をあたえているのを安吉自身感じてもいた。三つの高台にも生活があり、二つの窪地にも生活があった。高台の方の生活には一種の合理性があり、窪地の方の生活には一種の不合理性があった。この合理性には小ブルジョア的*なところがあり、不合理性の方にはプロレタリア的なところがあった。今では安吉に、ちんまりしたこの合理性が生理的にいやになっている。そこから、生活を、ひき抜いてしまいたい。しかし抜けない。それをそこに置いておくかぎり、過去からきて安心させるあるものがそこにある。彼は生活を、窪地の、乱雑な不合理性の方へ植えかえてしまいたい。しかしできない。植えかえる場合、何がどうなろうかという、未来からくる不安な何かがそこにあった。ただ、そこの匂いのようなものが彼を引く。しかし今は、指ケ谷町窪地は頭から消えていた。彼は、かれらにだけ一と目でわかる目じるしで路地へまがりこんで合宿の玄関をあけた。

「いらっしゃい……」といって藤堂の妹がでてきた。ここの合宿は、借り手の名藤堂で前から借りていて、ついこの頃から、金沢から出てきた藤堂の妹が飯つくりをしてやっている。

「もう見えていらっしゃいます」

その言い方、東京言葉に馴れようとして力めている調子が、やはり

今日も、仕合せな人にどこまでもついてまわる不幸という考えを安吉に刺戟した。痩せて背のたかい兄にたいして、ふとって背の低い丸い妹。顔色があおくて目の大きい兄にたいして、顔色があかくて目の小さい妹。しょうことなし相手のためにほほえむといった兄にたいして、太ったからだのなかに震源のようなものを持った、ぶるんぶるん震えの止まぬゴム棒か何かのような妹。そしてその兄の方が、生活にたいして、将来にかけてねばり強いものを持っているような気が安吉にする。健康でくったくのなげな妹の方に、こういう娘を搗きくだいてしまわずにはおかぬ不幸が待ちうけているように安吉に思えてならぬ……

「こっちですネ？」といって安吉は勝手に食堂のとなりの部屋にはいった。

「……」

そこに横坐りしていた青年が、何か聞きとれぬことをいって坐りなおしながら安吉に会釈した。青年は細長い指をして、膝のわきの灰皿で、無意識にゴールデンバット*をもみ消している。

「僕が太田の代りです」といって安吉も会釈した、「さっそく始めますか？」

しかし安吉は、その青年の、栄養の行きわたった蒼じろさといった顔色を目に入れたなり、いきなり非常な速さで昨日のことを思いだしていた。

昨日の昼めしすぎ、安吉は二階の机のわきでぼやっとして横になっていた。彼のなかで、自分というものが正当に認められたときの嬉しさといったようなものと、不当に否定された時の無念さといったようなものとが入りまじって、それは、自分にとっては問題と思えるあることが、まわりの仲間には全然問題でないらしいことからくる一種の淋しさでもあった。

そのとき合宿には誰もいなかった。小さな騒ぎをして昼めしをくった連中は、そのあと二十分ほどもがやがや喋っていたかと思うと、みなそれぞれの恰好で、教室へ出るなり、産業労働調査所へ出かけるなり、わきの大学や研究会へ出むくなり、安吉の知らない、安吉などのタッチしてない方面へ出かけるなりしてしまって、しんとした清水町の合宿全体に、安吉のほかにはおばさん一人しか残っていないことが気配としても安吉を包んでいた。そのおばさんにしても、片づけものをしたあと、自分の部屋へひっこんで、京都からきた手紙を皺をのばすようにして読みかえしながら、溜息をついたり、不安がったり、子供のように笑ったり一人でしているか何かだろう。その佐伯哲夫に、月に二度ほどずつ本の差入れをするのが、哲夫の逮捕以来の安吉の仕事にもなっている。哲夫本人が、本は片口に頼めと母あてに書いてきて、それが安吉にもみんなにも自然に受けとられてそうなっているのだったが、いつか母親が、安吉が京都刑務所上京区支所といちいち宛名に入れるのを心配して、口に出してそれをいったこともあった。持って行く安吉を、局でいやな目で見はしまいかというのが母親の懸念だったけれど、番地で届くのを承知のまま、刑務所あてということを知られたくない人のための、役所風なおめぐみ式便宜の意義も十分みとめたまま、しかし安吉は、母一人子一人の哲夫おやこのため、自分らは哲夫たちを支持するものだということを上べにまで表明したいためにも、包みの桐油紙にかならず上京区支所内と入れないでは気がすまなかった。追分局のわかい係りは、いつも宛名をてんで無頓着にカーボン紙へうつして受取りをよこしたが、安吉はそれが、百も承知の上でのことか、治安維持法*の存在さえ知らぬためのことか、どうやらあとの方に思えたけれども見当はつかなかった。そんなことから、合宿の人間としては新顔でありながら、安吉とおばさんとのあいだには、ほかの学生とはいくらか違った点での親しさも生まれている。

しかしごろっとして寝そべっている今の安吉の気持ちは、おばさんにそのことで話してみて始まる性質のものではなかった。安吉たちは、おばさんを合宿のおばさんとして大事にしていた。彼女は彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

で、一心になってこさえたキャベツ巻きなどが、うまいうまいといって食われるのを目にみえて仕合せそうに眺めている。しかし彼女の上に、合宿の一員でもあった息子が京都へ連れて行かれてからあと、息子のいた時分には見られなかった別の生活がちらりと姿を見せることのあるのに安吉は気づいていた。独り合点かとも思われたが、元気のいい大学生たち、その賑やかな笑い声が、かれらの出はらったあと、息子につながって、網をたぐるように母親の胸に集まってくるさまが何かの時安吉に思われる。ほかの連中にしても、気づいているにはちがいなかったが、ただそのことを口に出しては誰もいっていなかった。

「ちょっとはいってもいいか？」

お互いの部屋へはひと声かけてはいって行くことができたが、いくらか奥まったおばさんの部屋へは、用事もなかったがそれはできなかった。田舎風の家具のようなものがそこにあり、衣類用のつづらのようなものも片隅に置いてある。茶ぶ台の上へ封緘はがきを持ってきて書いていたおばさんが、何かにひっかかったらしく途中で書きやめて、封緘と鉛筆とを持って隠れるようにしてはいって行く暗いめの彼女の部屋……そのおばさんの姿も、寝そべっている今の安吉からは遠かった。

ついさっき、まだ安吉がもぐもぐ口を動かしているところへ、さきにすました秀才の内垣が本をかかえてやってきてふいに質問した。

「片口君、ちょっといいですか？」と彼はていねいな口をきいた。彼のていねいさはさっぱりしていて、ねばっこいていねいさに弱い安吉にはいつも助かった。

「叛乱は藝術ですか？」と彼はいきなりいった、「叛乱は藝術だとエンゲルスがいってるそうですが、藝術ですか？　どういう意味で藝術なんです？」

頬ばったまま安吉にはてんでわからなかった。

「わかりませんネ。わからない……」

「山添君はネ、藝術といってもそれゃ技術のことだろうっていうんですがネ。技術かなア？　技術ですかねェ？」

「技術じゃアないでしょうネ」何の根拠もない安吉にも、そう思われることは確かにそう思われた。

「どっちかといえアやっぱり藝術でしょう」

「やっぱり藝術ですか……どうして藝術なんです？」

やはりそれは、新人会へはいるまでは経験したことのなかった、合宿へはいってはじめて日常生活として経験するようになったいつもの問われ方だった。安吉との関係では、特に内垣にこの問い方が目立った。安吉にそれは快感のようなものでもあった。

いったい安吉は、大学へはいってまもなく新人会*という団体のあるのを知った。高等学校*でいっしょだった連中でそこへはいっているものがあり、安吉にもしきりにはいれとすすめていたが、二年ほどもぐずついていた揚句、このごろになって、これという自覚したきっかけもなしにふらふらとそこへはいったのは、彼の場合、直接のきっかけがむしろ感覚的なものだったためでもあった。太田に誘われて出てみた二つほどの研究会で、あつまった連中は、安吉を、感覚的に――と安吉は受けとった――平等にあつかった。かれらが今ぶつかって困っている問題、安吉には見当もつかぬ問題について、かれらはかれらと同じ水準での安吉の意見と解釈とを求めた。かれらは、日本労働組合評議会*を愛して日本労働組合総同盟*をにくんでいた。しかし安吉には、その二つがどうちがっているのかてんでわかっていなかった。かれらは、共産主義者を愛して社会民主主義者をにくんでいた。この二つがどうちがうのかもてんで安吉は知らなかった。第一彼はそれらの定義を知っていなかった。そのことがかれらに知れわたっても、「お前、そんなことも知らぬのか！」という顔をするものが誰もいなかった。

「かれらは求めているのだ。試しているのじゃない。試すということを知らぬのだ」という感じで安吉も当てずっぽうを答えることができ

た。どうかすると、事がらを知らぬための安吉の当てずっぽうがかえってあたっていることがあった。するとそれをかれらが採用した。安吉は小さな晴れがましさを感じた。そしてシャワーをあびたような、感覚が清潔にされて引きあげられるような初めての経験をした。彼は新人会にはいり、研究会に会員として出るようになった。研究会はいくつかの班にわかれていた。そして、どの班も、共通にスターリンの『戦略と戦術』というパンフレットをやっていた。安吉は編入試験ではいってきた生徒のようなまごつき方で、割りあてられた章を読んだ。革命に「段階」があるとは！　革命に「予備軍」があるとは！

「……この活動にもとづいての闘争展開を決定しなかったならば、前衛は労働者階級から切りはなされ、労働者階級は大衆との結びつきを失ったことであっただろう。国会時代の大衆の経験がなかったならば、カデット*の暴露とプロレタリアートのヘゲモニーとは不可能であっただろう」

ヘゲモニー*というのは何のことだろう？　カデットというのは何のことだろう？　松本たちと酒をのみのみしてるうちに、めぼしいものを一とかためずつ売ってきてしまって、申しわけばかりに残っている安吉のポケット字引には Kadett という言葉がのっていなかった。

「召還主義の戦術の危険は、この戦術が、前衛を幾百万の予備軍から切りはなす恐れのある点にあった」

召還主義というのは何だろう？

「メンシェヴィキ*とエス・エル*とが、戦争と帝国主義との味方だという正体をまだ暴露しきっておらず……」

メンシェヴィキというのはどうやら見当がついた。しかしエス・エルというのは何だろう？　なに？　なに？

「党全体の計画的活動と、労働者階級の闘争の指導とが、これらの原則を実行せずには不可能なことは、論証するまでもなかろう。組織問題におけるレーニン主義は、これらの原則を断乎として実行することである。これらの原則に反対する争いを、レーニンは、わらうべく投げすてるべき『ロシア風ニヒリズム』『貴族的無政府主義』と呼んでいた……」

してみると、彼の愛読した「蒼い馬*」の主人公や作者なんかは、「わらうべく投げすてるべき」ものなのか？

安吉のまごついたのはそんなことでの無知でだけではなかった。ときどき酒をのまずにいられぬことが彼をいっそうまごつかせた。合宿の連中は一人として酒をのまなかった。佐伯哲夫が一人だけのんでいただろう。しかし今は、彼は独房で煙草も吸わずにいるにちがいない。安吉はこそこそと隠れてのんだ。しかしある日、やはり内垣が、そのときも何かの本をかかえたなりで安吉に訊いた。

「片口君、酒はほんとにうまいですか？」

「うまいです」と安吉はしょうことなしに答えた。

「どんな風にうまいんです？」

内垣には、酒がうまくて飲むという人間が、不思議な習性をもった何かの動物のように――しかしその習性が別に人に害はあたえない。――不思議に見えるらしかった。内垣の澄んだ目を見ていると、酒をのむこと、むしろ酒が好きだ、うまいということがすでに下等なことのように安吉に感じられた。今では安吉にも、のまずにいることがそれほど苦痛ではない。真面目な話にかぎってシラフでは切りだせなかった松本や鶴来とも、このごろは酒なしに真面目な話ができるようになった。そして十日か二週間、すこしも飲まずにいて、それを取りかえすほど大酒をのんで、後悔と卑下とで吐きそうになってこそこそと夜おそく合宿の玄関をあけるのだった。

内垣が今かかえている大判の本は、藝術だとか技術だとかいうことの書いてあるその本ではないらしかった。たどたどしい、但書きのいくつもついたような安吉の解釈を、「はア……はア……」といって聞いている内垣が、安吉には気の毒をしているようで重荷だった。安吉はもっといくつも但書きをつけねばならなかった。

「つまりこうですか？」といって、開けた本の頁へ指を入れて、それ

を閉じて内垣は腰のうしろへまわした。「技術というのは手続きですネ。はじめにプランができて、それを具体化する順序がきまって、それをその通り順々に運んで行けばいい。第一のつぎに第二をやればいい。第一ができたからといって、第二が第二でなくなるということはない。すなわちあらかじめ決定されていることが肉づけられるだけだ。藝術はこれと異なる。プランはある。しかしそれが実現されはじめるや否や、それは新しいものをつくりだす。いちおう第一段、第二段とありはするが、それは予定の終了という形をとらない。その点で手続き実現の性格が異なる。第一段の実現があたらしい条件となって、ある程度予見されていた第二段が第二段でありえなくなり、全く異なった第二段があらわれざるをえなくなることがある。このものは、第一段の実行によってのみ実現の条件となる。この実行ということが藝術実現の手続きの性格だ。そこに動があり、創造がある。これが技術の静と異なる。叛乱があたかもそれだ。大略のイメジはある。しかしそれが実現されはじめるや否や、予見されたものとはちがったものが生まれうる。生まれうるというよりは、すなわち可能というよりは、むしろその方こそそこでは一般的だ。それは予見自身をも変革して行く。叛乱はかくて創造だ。それは藝術だ。こうですネ？」

「うむ。ま……」

「大分わかってくるぞ。どうもありがとう……」

それだけ幸福になったといった内垣の調子が安吉をも幸福にした。エンゲルスのいったという元の言葉からはなれてしまって、解釈だけ勝手に一人あるきしすぎた気がちらりとしたがそれは消えてしまった。内垣が、人のいうことを楽しむようにして聞いていて、本人にも案外なへんまできれいにまとめてかえしてくれるのが小さい音楽をきくように安吉にはこころいい。いったい新人会の連中には、これまでの安吉たちとちがって、他人の話をしまいまで聞こうとする癖があった。そのうち安吉は、それがレーニンの真似だということを知ったがやはり感心した。安吉の場合は、言葉がさきに飛びだしてしまう。飛びだしてみると、それは、まだ形をなさぬ形で頭に浮かんだ、一瞬まえのものとは違ってしまっている。感情をまじえた表現になって、思わぬところで相手を傷つけてしまうこともある。相手の話をじっと聞いていて、最後に決定的な自分の意見をいう――その真似にはキザっぽい気取りもみられたが、それでもそんな「心がけ」になれるところが、相手にみなまでいわせずにやっつけてしまうことに互いに快感を感じてきた今までの安吉たちの行き方よりもいいことのように見えた。しかし内垣にはその気取りがそもそもない。彼には、長者にして秀才なるものというところがあった。安吉は二階へのぼって、ささいな幸福感のなかで机の引出しからウコン木綿の小さい包みを取りだして膝の上にのせた。

あぐらの膝の上で安吉はその小風呂敷をといた。なかから鼠色の古綿にくるんだものが出てきた。安吉は古綿をむいた。なかから人形のようなものが出てきた。高さ四寸ばかりの蠟石をきざんだ坐像で、衣の襞なぞは窪み一本であらわしている。そのつやつやしたヤニ色のものを手の平にのせて、それをまわすようにして安吉はためつすがめつして眺めた。まわすにしたがって、受け口の婆さんのような人間の表情がほんの少しずつ変って見えてくる。そのとぼけたようなアルカイック風なほほえみが、言いようのない安らかな楽しみを安吉にあたえる。重さともいえぬその重さを手の平に感じることに、内垣との話から受けた一種の幸福感の安吉のなかでの反芻があった。安吉はこれを父から貰っていた。朝鮮のどこかで、ある種の日本人が、古い朝鮮の墓をあばいたりして金目のものをうばい取って、ガラクタと思われたものは二束三文で売りはらった。そんな一つを買って、併合後の朝鮮で小役人をしていた父が、女房子供からはなれて一人であちこちしていたあいだこれを離さずにいた。安吉の方でくれといったわけではなかったが、欲しければ持って行けと父からいわれたとき、貰わねばならぬことが一ぺんにわかった気がし、もともと欲しかったことが自分にも一ぺんにわかった気がして安吉はそれを父から受けとった。石材

がやわらかくてすぐに脆くかける。新人会にはいったとき、これからどことなくがたつくように思われて鶴来のところに預けたが、このごろできた鶴来の愛人が、それを見て「気味がわるい……」といったと鶴来がいった。気味はわるくない。気味のわるいのはむしろ——それがほしいのだが——あの爵だとか角だとか、何だか読めぬ字で名の書いてあるアヤメもわかぬ*銅器などの方のやつだ。あすこまで行くと、ほんとうに気味がわるい。ああいうものの方が、上か下かといえばずっと上だろう。しかしこの方には、そんな底知れずがないかわりに気安さがある。気楽で平民的なたのしさ*がある。やみくもに見たくなってついこのあいだ鶴来のところから取ってきておいたのを今ひょいと取りだしたのだったが、これ以外には、安吉はどんな意味でも美術品といえるものを持っていなかった。姿形からくる美で楽しさをあたえるというものを持っていない。

「しかしこんなもの楽しむの、あんまりいいことでもないな……」

すると安吉の頭に、内垣のいった「叛乱」にむすびついて*伊集院の鼻の高い顔が浮かんできた。

「何であいつは、ちょろちょろしたり逃げたりするんだろう？」

伊集院は、安吉の知るかぎり佐伯たちのグループの大物と見られていて、佐伯たちが逮捕されてしばらくした今もまだ逮捕されていないらしかった。一と月半ほど前、彼は大胆にも大学構内の研究会へ姿をあらわした。大衆活動としてのデモンストレーションのことがそのとき問題になっていたが、話がある点へきたとき、彼が上半身をテーブルへのしかけるようにして、のしかけるのにつれて声をひそめてこっそりというのを安吉は片隅から聞いた。

「……いな、問題はAufstand*にあるのです。将来におけるAufstandにあるのですよ」

安吉には、問題の急所が、自分の無知からもくるらしく感じられたが一言でわかった気がした。同時に、滑稽で味気ない気もした。何でドイツ語なんか*使うのだ？　何で声をひそめたりなんぞするのだ？

伊集院がいくら顔をつきだすようにしたところで、部屋は百人ぐらいはいれるガランとした第二学生控所だ。誰もかれも、逮捕を逃げきっている伊集院に、彼が忽然としてここにあらわれたことから特別な気持ちに知らずしらずになっているのだ。一座全部が、危険な伊集院と秘密をともにしているという気になっている。伊集院の声の出し方には、はじめて発言される「叛乱」とか「蜂起」とかいうことが非合法なためか、彼の身柄そのものが非合法なためか、どっちともわからぬというところがあった。鹿児島人*らしい雄弁がいっそうそのことを安吉に刺戟する。美丈夫といったタイプの伊集院が、ここで彼一人だけキモノ・ハカマで出てきていることもそのことを安吉に刺戟する。「叛乱」だの「アウフシュタント」だのといってみても、一度口に出してしまえば、秘密めいた影は——すくなくとも安吉には消えていた。

「いったいどっちが本物なんだい？　酒なんか飲む佐伯が手もなくつかまって、ピューリタンくさい伊集院がつかまっていない。アナーキーで身勝手なとこのある佐伯がつかまって、理路整然とした伊集院がつかまっていない。数学の本が読みたいだの、うんと藝術的なものを入れろだのといっておふくろにせきたててくる佐伯と、維新の志士みたような白い顔をして、捕吏の目をくぐってという恰好でひらりとやってきて煽動的な話をする伊集院と……いったいあれゃ、組織的に動いてるんかい？　早くつかまりたくなってるんじゃないのかい？　自然主義的にいうとそうなるナ。それだからかえって伝染するんだ……」

安吉は瀬田を思いだした。

「奴は、そのつぎあった別の小研究会で、さっそく伊集院を受売りして『問題はAusstand*にあるのです』といったんだからなア。FをSとまちがえて、二度もAusstandといった……秘密めかすほど伝染してくんだ。自然主義以前だ……」

「しかしおれが案外そうでなくはないからナ……」と思ったところへ、いちばん奥の部屋から村山が出てきて「何だ、それ？」といって

安吉の手許を覗きこんだ。

村山の部屋はいちばん奥にあった。廊下がないため、階段へ行くのに村山は安吉たちの部屋を横切らねばならない。それを気の毒がって、彼は便所へ下りるのさえ倹約するといった男だった。彼は全国の高等学校との連絡を受けもっていて、毎夜おそくまでせっせと手紙を書いている。いつか安吉は、彼につれられて朝早く京都大学からの連絡者を迎えに東京駅へ行ったことがあった。市電を降りた途端に、先の見えぬほどの大勢の人間が歩いてくるのが安吉の目にはいった。行列とも、かたまりとも、いいようのない量でそれはやってきた。安吉たちにぶつかりそうになりながら、安吉たちには縫うにまかせて、人波そのものは傍目もふらずにどこにか向かって押して行く。天に向かって行くのか地に向かって行くのかわからぬといった陰気な勢いでそれは押してきた。

「何かデモンストレーションがあるのか？」と安吉は訊いた。

「デモンストレーション？」

ちらりと安吉を見た村山は、目をそむけるようにして「つとめ人だ」と軽くいった。相手を困惑させまいという心づかいの調子が安吉に受けとられて、そんな風に庇護されることが安吉には恥しかった。

その村山へ手の平のものを渡しながら、安吉は「土中ものだろう」といった。

「土中ものって何だ？」

「土の中にあったものということだろうサ。ハニワともちがうけれど……」

前から安吉は、新人会の連中の藝術感覚にそれほど信用をおいていなかった。かれらのうちの文学好きが、このごろしきりにプロレタリア文学といって騒いで安吉もそこに巻きこまれているが、しかし彼には、彼とほかの連中とでは、品物の受けとり方に確かにちがいがあると思われて仕方がない。安吉には、筋はともあれ、作の感覚がプロレタリア的なのでなければ承知できない。ただし彼も、どんなのがプロレタリア的な感覚かと訊かれれば、やはりほかの連中の真似をして、社会科学と心理学とをこねあわしたような言葉を並べる以外に説明はできなかったが、それでも頑固に、自分ひとり決めでそう呑みこんでいた。ほかの連中は、理窟の立つものの方を持ちあげて、つい安吉もなるほどと思うことがあるが、一人でいよいよとなればそれにはついて行けなかった。

そのうちに彼は、別のことにも気づいてきた。新人会のうちでも指導的な人間が――それはほんとうに指導的な人間で、学問も深く、人間としても落着いて信頼できたが、案外に古い藝術感覚にひたりこんでいる。なかには、キモノに角帯をしめて、それに片手指四本つっこんで歩くのが気持ちいいというのなどさえもいた。このまえ、山添の兄貴の方が追分の合宿を出て、家を持って、そこで特別研究会があって安吉も呼ばれて行ったが、いかにも小ぢんまりとしてきれいな一戸建てで、その二階へあがると、一方の控え部屋に新しい洋服だんすが置いてあり、医科の方の本もまじった中型の本箱には、安吉の大きらいな緑いろのカーテンがかかっていた。机が二つあるのは、一つは細君の方の勉強机だろうか？　そこに、ブルジョア的なと安吉の考える婦人雑誌が二冊きちんと揃えてのせてあり、何よりも、部屋の隅にふくれた座布団が積んであって、山添自身は別のひろい布団を敷き、あつまってきた連中には積んである分を一枚ずつあてがってくれたのが安吉をおどろかした。自分の育った家、となり近所、親類、それから小学校、中学校、高等学校、大学ときて、こんな生活のなかにいたことは安吉には一度もなかった。偶然と知っていても、初めてだという方が先に安吉にきた。山添は対の羽織を着て、先が房になった紐をしめて、まっ白いメリヤスの股引の足首を見せて、しぼりの兵児帯を巻いてにこにこしてあぐらをかいている。家庭を持ったのだから、ああいう婦人雑誌のあるのも理窟としては受けとれる。しかしそれが気にくわない。医科で医者になるのだとすれば、山添は家が金持ちなのだろうか？　そこへ細君が出てきて挨拶をしたが、いかにも昔ながらの

若妻といった風情に見え、これがどこやらの専門学校で、そこの社会科学研究会のチャキチャキだったということが安吉にそぐわなく思われる。かえってそこがおもしろいと考える余裕が安吉にはない。その細君が五六人に紅茶をいれてくれた。その茶碗が気にくわない。いつか見た桃谷陶園の陳列にあった方が、贅沢には贅沢でも——なるほどそれはそのままで矛盾だが——ずっとプロレタリア的だったと安吉は思う。しかし山添の場合はあけすけだからまだいい。

「藝術的感覚だけはこっそり隠している奴があるからなア……」

安吉は疑りぶかくなっていた。ただ安吉には、そんな連中が、酒などは飲まないで、それも無理に我慢で飲まぬのでなくて、規則正しく勉強家であるのが押えになってかぶさってきていた。「おれが古いのかも知れぬゾ。かれらは藝術的に低級だ。中途半端だ。でも、おれの方は、純粋に古いのかも知れぬゾ」と思う。さりとて彼は、新しいものへも近づくことができなかった。太田なぞは、電車の定期券のようなものを持っていて、それでずっと築地小劇場へ通っていた。新人会でも幹部として動くようになってからは止めたらしいが、その小劇場へさえ安吉は一度もいったことがない。安吉は、音楽を聞きに行きたいとほとんど生理的に思うことがあった。すると、そこへあつまってくる青年男女の姿が思いうかんできて元気がにぶってしまう。安吉の頭のなかで、噴水が十も二十も並んでふき上がってくるような感覚でピヤノが連れて鳴る。安吉は輾転反側して腰をあげることができない。

いま安吉に、「かえって村山なんかが……」という気がちょっとした。理由というほどのものはなかったが、村山に犬儒派的なところのあるのが、逆に安吉に、村山にほんとの理解力を予期させるもののように思わせたのだった。

仙台の高等学校からきた島田が、去年の夏ここの合宿にいた。安吉はまだ新人会にはいっていなくて、ただプロレタリア文学のことで佐伯を訪ねてきたのだったから、島田の名も村山の名もむろん知らなかった。佐伯との話が一段落して、安吉を送りだして佐伯が茶の間へはいってきたとき、連中がそこらを濡らして西瓜を食っているところへ安吉はぶつかった。

「佐伯、ほら、食え」と誰かがいって、見知らぬ安吉にも皿を押してよこした。

「仙台から出てきたといってるんだから、もすこし待ってろといってくれてもいいじゃないですか？」

西瓜を、胸のところに両手で支えるようにして、一人の恐ろしく鼻の高い青年が、一人の色の黒い青年に詰るような口調でいっているのが安吉の目にはいった。

「だって君、何も君から話してなかったじゃないか？」

「話してなくったってですネ、本人がそういってるんだし、第一ようすを見ればわかるでしょう？　女だっていったって姪ですよ」

「よし。わかった。手落ちは認めるよ。しかしおれはまちがってはいなかったゾ」

そういって、まだ不服そうな相手を見ると、「何だ？　鼻がつっかえて西瓜がかみつけねえじゃねえか……」と色の黒い方がいった。

「……」

鼻の高い方は、見知らぬ安吉の方をちらっと見て苦笑いした。その色の黒い方が村山だった。

去年暮れのある土曜日——安吉はもう合宿にはいっていた——今日は晩めしのあとで私生活批判会をやるという申合せが出た。小さくなって安吉は批評をきいた。それがすむとお茶をいれて菓子を食うことになり、お互いの弱点を指摘しあったあとの空気の、ぎごちないものの残ったのをなでつけるといった気味で今度はお互いの容貌、体格のことが問題になった。またそのときは、その後二三人変動はあったが、揃いも揃って美男がこの合宿にあつまっていた。私生活批判がすんでほっとした安吉は、それとは違った不安でもう一度ちいさくなるほかはなかった。彼は、連中が諧謔まじりに欠点をほじくりあってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com